



Title	近代上方における二人の漢詩作家：磯野秋渚・芝川紫草
Author(s)	水原，渭江
Citation	懷徳. 1965, 36, p. 28-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代上方における二人の漢詩作家

—— 磯野 秋渚・芝川 紫草 ——

水 原 渭 江

ここでは近代上方詩壇で注目すべき詩人の一人として、磯野秋渚を取り上げ、さらに、その子弟にあたる薄命の作家芝川紫草について書き記しておきたいと思う。

○ 磯野秋渚の文藝について

磯野秋渚關係の資料の借覽にあたり、朝日新聞社主上野精一氏及び同社社史編集室の金親不二男・山田大介の兩氏に種々御世話になつたことを感謝いたします。また、『五華留影集』その他の詩集を提供していただいた、詩人弘末直誠氏に對して、厚く御禮申し上げます。

昭和三十八年六月三十日記

近代上方の詩壇で特記されるべき詩人の一人に、磯野秋渚がある。若きころは於菟介といつたが、後年は専ら惟秋といつた。字は秋卿といい、號を秋渚と稱した。また、別に少白山人・杏華齋ともいい、一般には碧雲仙館主人・玉水廬主人とも稱した。

文久二年八月二十日に三重縣阿山郡上野に生まれた。その生家は丹波守員昌のころより上野藩に仕えた、名ある武家で、生家は藩主から賜つた邸宅であつた。

十歳の時に藩校の崇廣堂に入り、町井臺水について漢籍を學んだ。しかし、藩校にいたのはしばらくの間で、その後間もなく、大阪に出て東區第一小學校の習字の助教師をした、それは十六歳の時のことである。先生といつても、

これは正式な教員でなかつたので、十二圓の月給に甘んじなければならぬ程のものであつたが、生來の好學的性向から、専ら自習獨學で書道とか漢學の研鑽につとめていた。第一小學校では書道の外に國語を教へたりしてゐた。^(註2)また、聞くところによると、音樂を擔當したりして、オルガンを弾いたりもしてゐたようである。^(註3)その秋渚が、朝日新聞社に入社したのは、明治二十九年二月で、年令からいへば三十五歳の時であつた。新聞社では編集局の校正にたずさわつてゐた。

新聞社内(註4)の秋渚は、明治二十四年に出來た浪華文學會の三騷客と雅交をもち、そのころ出てゐた『なにはかた』や『浪華文學』とか『都の花』『しがらみ草紙』などにしばしば漢詩を寄稿してゐたが、一方、木崎好尚と一緒に『小文壇』を世に出してゐた。^(註5)秋渚の文學活動は、校正係という職業の枠外で發揮されることが多かつた、書の實作は觀鶯會などの展覽會を通じ、書論とかその評論は『書道』とか『書畫界』『書道及書道』などの雑誌に發表するなど、多彩な活躍をしたが、漢詩壇における活躍は、これとは別に實にまた目醒しいものがあつた。^(註7)ここでは詩壇における活躍について、一瞥しておこうと思う。

明治の中期以後の漢詩壇は、大きく分けて東京と上方との二つに色分けされるが、覇權はむしろ東京の詩壇にあつた。東京では森春濤・槐南の周圍に清朝の性靈派の流れを汲む岩溪裳川、明の七子を標榜した國分青崖、槐南門の才人野口寧齋など、實に多士齋々で、群雄割據を呈してゐた。上方の方では、神田香巖とか福原周峰などがいた。このような詩壇の餘響をうけて、若き秋渚は朝日新聞社を背景にして、西村天因と力を合せて縱横活達に詩筆をふるつた。『詩林』『詩苑』『隨鵲集』『雅聲』『文字禪』とか『大正五百家絶句』らを披らいてみれば、その活躍の一端を容易に知ることが出来る。このような秋渚が上方を中心として活躍した主な時期はといへば、明治の末期から大正にかけてである。

明治の末年、上方には淄流作家の石橋雲來とか木蘇岐山、螢雪軒の儒者近藤南州などがいて、詩會は盛んに催され

ていた。秋渚はそれらの詩會に始終出入りして、數多くの作品を作っている、その中に「冬夜澱上」というのがあ
る。

清宵不可擲、せいしやう 清宵は擲すべからず

幽獨漢之東。しゆうどく 幽獨なり漢の東

月色一何白、げつしよく 月色いつに何んぞ白き

水光相共空。すいこう 水光ともにはるかなり

遵州披宿莽、しゆくぼう そぞろ宿莽をひらき

抗策逆尖風。くわいさく 策もて尖風にたたずむ

村步連平楚、むらふ 歩めば平楚つらなりて

蒼茫遠近同。そうぼう 蒼茫として一望のうちにあり

この作品はそれに次韻した阮舜琴の題に、

秋渚詩伯錄示冬夜澱上近作、語硬於漢魏、調高於晉唐、頗有憂々獨造之概、風誦一過、齒頰俱芬、謹次原韻、自
慚西於之輦、勉竭綿材、聿和西崑之作、伏希大雅哂而正之。

とあるように、平淨で調べ高い詩の一つである。このころに七月の堂島界隈の風物を詠んだ、敘景詩十首ばかりを作
っているが、「澱上夜泛」の聯句では、

涼雨過江洗孟秋 芹水衫衿澹淨月華流 秋渚風吹不斷青灣水 岐山天地三人一片舟 芹水 (聯句三の一)

と、この上もなく淀川の夜景を木蘇岐山らと楽しんでいる。

また朝日新聞紙上では明治四十一年九月二十日に發表されたが、實はその去る六月十五日に西村天因・内藤湖南・
近藤南州らの七氏で催した、玄樹禪師の四百年祭の時の詩がある。(註8) その七氏の聯句は、

桂影遠被集

戊申六月仲五、多嶺西村子俊時彦修桂庵玄樹禪師四百年祭典於其小天地閣、來會奠香者、近藤純叔元粹伊豫人、木蘇岐山牧美濃人、磯野秋卿惟秋伊賀人、内藤炳卿虎陸中人、眞下明卿敬之山城人、藤澤士亮元浪華人、併孝七人、浪華後學木崎孝維則氏識。

孔子歿後三千年時彦微言中絶有誰傳敬之尋將墜緒留遺篇元濂洛關閩心法嬾虎主人闡幽筆如椽牧薰風大梅梅子前惟秋三杯談古弔前賢元粹

で、これなどは當時の上方の詩壇の大勢が、朝日を中心に動いていたことを如實に物語る資料の一つといえよう。

〃乙字丁字鴨頭水〃を眺めながら、〃老卜棲遲獨自憐〃とて、堂島の風月を愛した秋渚は、始終大阪に居を占めて、東京の詩壇に出ることはなかつたけれども、作品はしばしば東京詩壇をにぎわしていた。填詞作家の森川竹簾の編集していた『詩苑』には、各巻を通じて頻見される。

衣暈星酒酒叵消、
酷暑まさに消じがたく

熱香熏徹舊窓寮。
熱香は帯びぬ舊窓の寮

丁簾漾影波纔皺、
丁簾の波影わずかにしわみ

手枕生寒夢乍搖。
手枕の夢はたちまち揺らぎぬ

金粉成塵春事去、
春事またいづれのところか

園林未暑夏陰饒。
林下の風味おのずから涼し

牆頭似待題詩客、
牆頭には詩客の待つあるか

鳳尾青抽六尺蕉。
六尺の芭蕉青さらに青し

(夏初遣興―詩苑四十四集)

この作品などは、まことに超軼で俗塵がなく、一瀉千里に詠み上げた詩情は、雍容として一つの境界を開いており、よく清詩の餘薫を傳えている。明治末年から大正の初めにかけての秋渚の作品には、特に流麗清婉な清初風のものがあるが、大正も半ばを過ぎてからは、就中、王漁洋の神韻派の影響が濃厚に看取される。それは大正初期の『五華留影集』^(註11)とか『五花載詠』^(註12)『玉水題襟集』^(註13)などの諸集を披らけば自ずと理解されることである。

『五花載詠』に見える

那邊蘇水兩三橋、

那邊の蘇水兩三橋

一炬章臺魂易銷。

一炬の章臺魂を銷じやすし

壬婦丁夫作婚後、

壬婦丁夫婚を結びし後

喪家犬瘦畫蕭蕭。

家を喪い食なく瘦犬になりに

(原五録二)

とか、明治四十二年七月三十一日の、天満の大火後の堂島周邊の復興ぶりを詠んだ、

從是繁華十倍加、

これより繁華十倍を加わう

香街旁午美人車。

香街に旁午たり美人の車

蘇溝一道暗疏水、

蘇溝一道疏水くらく



大阪東區第一小學校時代の磯野秋渚
(最後列左端)

北畔酒家南妓家。
北畔には酒家南には妓家あり

あたりを見れば、秋渚の風雅の由來するところを知ること出来る。大火後の翌年に漁洋の二百年祭を催したことは、秋渚の漁洋への傾倒が、並々ならぬものであつたことを端的に示すものである。(註13)

秋渚は戊申吟社・鷗雨吟社・成春吟社・玉水吟社・華城吟社・精華吟社・桂社・碧社・黃梅吟社などの數多くの詩社に主盟及び同人として關係をもち、つねにその指導的な地位にいたが、また、當時の東京を中心とする著明な詩人たちとも親しく交わつていた。

田邊 碧堂

孤館聽秋十許年、移來修竹也堪憐。

支君吟作琅玕響、不斷清風瀟瀟緣。

高野 竹隱

錦江倦客數歸年、獨立蒼茫誰復憐。

河伯東行不同去、乙波丁水一黃緣。

國分 青厓

江湖幾歲誦君詩、雖未相逢似舊知、

自有斯文關氣運、扶輪大雅共相期。

これなどは、その實録といつてよい。

ところで、『五華留影集』に

唱出才人新樂章、
となだ さいじん しんがくしやう

猿聲鵲語費思量、
えんせいけんご しりやう

近代上方における二人の漢詩作家



若きころの磯野秋渚

紅窓怨對扶桑月、

紅窓にうらむ扶桑の月

不説王郎説竹郎。

王郎をとかず竹郎をとく

○

一寸相思萬緒工、

一寸の相思萬緒なくみに

海棠花裏姓名通。

海棠の花影に詞名たかし

新詞早上驚桃口、

新詞早くも驚桃の口にのぼり

傳遍錦城歌吹中。

あまねく傳う錦城歌吹のうち

というのがある。これは森川竹礫の填詞を鑽えたものであるが、題に「聞蜀妓唱森川竹礫所作詞者」と記し、竹礫に寄せたこの敬仰は、まさに詩史の一挿話ともいふべきものであろう。^(註14)

なお、秋渚の詩論は、『文字禪』に見える「張船山絶句箋」があるだけで、十分に知ることには出来ないが、書論は「山本竟山過、俱論近人字」と題する古詩の長篇によつて窺ひ知ることが出来る。初めは貫名海屋の書法を學んでいたが、後年は文徵明へと流れて行つたようである。

このように、磯野秋渚は近代上方の詩壇においてはいう迄もなく、それは明治末年より昭和の初期にかけて

磯野秋渚先生

枝序感
總、柳、枝、人、斷魂、碧、紗、籠、字、庭、題、存、煙、絲、雨、葉、重、回、
昔、一、瞥、三、春、舊、夢、痕、

花前感舊

神韻、
萍蹤、猶、在、天、涯、回、首、昔、遊、跡、已、跡、不、分、春、光、無、賴、
甚、東、國、知、雨、送、飛、花、

記、南、詞、稿

底、清、
秀、擅、乾、
江、卿、和、理、
閑、飯、魚、今、日、幾、何、肥、
酬、人、絕、句、
素、衣、入、批、
花、夢、正、歸、
百、里、寄、書、先、試、

秋渚先生詩集

請正

琴窗水屋實成

の、日本詩壇の一翼を擔つた詩人の一人であつたが、また、書家としても著明な存在で、その書論をもつて書道界に臨んだかれの立場は、最も權威のあるものであつた。いい換えるならば、朝日を中心に西村天因・内藤湖南らと共に、新聞界を代表する秀れた文藝の人であつたのである。その才藝は、ほとんど獨學によつて培われたが、その豊かで香り高い藝術性は、秋渚自身の、常にたゆまぬ人間的努力による結果であつたといつてもよいであらう。

註1 朝日新聞社編『上野理一傳』P. 550—553

東區第一小學校には同じく木崎尙も代用教員として勤めていた。秋渚は明治二十七年に朝日新聞社に入社した。

註2

菊山尙年男談「磯野秋渚」ハ朝日新聞大阪本社史編集資料V 大村友之丞談「磯野秋渚」ハ朝日新聞大阪本社史編集資料V

註3

朝日新聞社主上野精一氏談による。

註4

三縣客とは、西村天因・渡邊霞亭・本吉欠仲の三氏をいう。明治二十四年五月十三日付の朝日新聞には浪華文學會の事情を詳しく報じている。

註5

朝日新聞社編『上野理一傳』P. 550

註6

觀鷺會は明治四十年に設けられ、大阪博物館の衆樂館で、沖繩とか韓國の珍らしい品物や書畫を展示したものであつた。その時、參考資料として、秋渚執筆の書が數點出されるのがしきたりであつた。

註7

明治三十二年に、朝日新聞に「月曜目錄」と稱する美術文藝の欄が設けられたが、そこで活躍したのが、西村天因・内藤湖南・後藤南翠らであつた、特に木崎尙

近代上方における二人の漢詩作家

註8

尙と磯野秋渚の活躍は目醒しいものがあつた。木蘇岐山の五言古詩、磯野秋渚の五言律詩、眞下芹水の五言古詩、西村天因の五言律詩三首が新聞紙上に發表されている。

註9

秋渚の住居の前は、堂島川が乙字型になつていて、乙字灣水と名付け、西濠を丁字灣水と名付けていた。丁字灣の東は、片山北海の孤松館のあつたところであり、文久の末年には、松本奎・松林飯山・岡鹿門たちの雙松岡塾のあつたところである。

註10

『五華留影集』一卷は、大正五年に付印され、各體100餘首を収めている。なお、前年に上梓した『五華載詠』一卷を後末の付録につけ加えている。

註11

『五華留影集』とか『五華載詠』の、五花ハ華Vとは、小川宗五の五花堂に由來している。五花堂とは、明暦のころに京都から來た小川宗五が茆鉏園を設けて、五種の花を植えたことにはじまる。

『五華載詠』一卷は、明治三十七年ごろの堂島とか櫻橋界限の風物を詠んだものであり、何れも絶句ばかりである。

註12

『玉水題襟集』一巻は、大正十一年に上梓され、題簽は長尾雨山が執筆し、序文は西村天因・内藤湖南・長尾雨山の三氏が書いている。大正四年の春、玉水精廬で迎えた六十歳の華甲に寄せられた祝詩などを纏めて一巻にしたものである。

註14

秋渚の、土佐濠の玉水精廬移住の七言絶句三首に和した詩人のうちには、靱山衣州・横川唐陽・田邊碧堂・高野竹隱・八木蓑香・木南向陽・日下勺水・國分青崖・長尾雨山など、當代一流の詩人たちがいる。

註13

庚戌五月十二日災後新寓造成、乃復移琴書、其十九日邀諸友、修漁洋山人二百年祭事、揭遺象陳遺著、賦小詩五章、以代蘋藻。
一代正宗香案班、下看燕雀聒叢官。

○夭折の詩人芝川紫草

『紫草遺稿』^①をある圖書館の片隅の書庫のうちから探し出したのは、極めて偶然なことであつた。たまたま、頼山陽關係の資料を捜していた時で、『紫草遺稿』を探していた譯ではなかつたが、『紫草遺稿』を披いて見ているうちに、その一巻の極く初めの部分に二〇〇餘首の漢詩があるのに氣付いた。その數日後、私は何とか讀詩感を纏めにかかうとしていた時、川並秀雄教授の目にこれがとまり、始終昵懇な交りをしている芝川又四郎氏は、この作者の令弟ではなからうかという、實に有難い示唆をうけることが出来た。果して芝川又四郎氏は、この詩人の令弟であつた。従つて、これを機會に私はこの詩人についての幾種かの口述と一・二の資料を借覽することが出来た。ここに芝川紫草についての稿を草す運びとなつたのも、こうした緒縁の結果によるのである。

昭和三十八年八月二十日記

芝川、紫草とはその號であつて、又三郎といつた。明治九年二月七日、大阪市東區伏見町四丁目三十三番地の本邸

飴山拈掣倉山謔、萬丈光長天地開。」

一拈神韻力能持、絃旨無聲聽始奇。

彈指華嚴樓閣現、曉風殘月白蓮詩。

これは大野遼鶴が、中國の蜀に遊び、當地の兒女が森川竹礪の詞を歌っているのを聞いて、このことを日本に傳えたことから、日本の詩壇で評判になつたためであるが、竹礪もこれを嬉しく思つたのか、次のような詩を作っている。

紛々糸管錦城天、誰使儂詞萬里傳。

一笑曉風殘月後、而今重有柳屯田。

(水原琴窓「日本詞學之概況」)

△華文毎日三卷二期十八號V)

で生れた。そうして、大阪府立尋常中學校を経て、舊制五高から京都大學へ法學部Ⅴに學び、その卒業後は日露戰爭に従軍し、明治三十七年五月二十八日、野戰病院で悲運な生涯を閉じたが、その時、わずかに數え二十九歳であつた。そのかれが比類稀な少壯の詩人の一人であつたとは、上方はもとより世の中の多くの人々は氣付くこともなかつた。このことは、致し方のない事實であるとしても、實に惜しむべきことである。この夭折の詩人について少し書き留めておこうと思う。

かれは四歳で生母を亡くしてからは、専ら乳母によつて養育されたが、家庭における教育は頗る恵まれていて、數多くの師匠とか學者について豊かな藝域を培うことが出來た。八歳の頃には謠曲、十歳には三瓶浩齋に師事して書道を學び初め、そのかたわら、浦上三石に漢學の素讀を受け、漢詩にも手を染めて行つた。漢詩の方は専ら田中牛門の指導を受けたが、そのころの作品は『紫草遺稿』の第一篇の第一章へ家庭教育時代Ⅴに収録されている。作品の數は200餘首で、すべて近體の詩ばかりである。五言の絶句では、「重陽」・「山寺觀楓」・「落葉」・「遠山初霞」などの、視覺的な作品が多い。

客夜即事

臥聽秋風裡、
ふして聽^き秋風^{しゅうふう}のうち

荒涼落葉聲。
荒涼^{こうりやう}たり落葉^{らくえつ}の聲^{こゑ}

颼颼驚客夢、
颼颼^{そうそう}として客夢^{きやくむ}を驚^{おどろ}かしむ

慘淡坐深更。
慘淡^{さんたん}として深更^{しんこう}に坐^ざす

氷解

簾外春風遍、
簾外^{れんがい}春風^{しゅんぷう}あまねく

近代上方における二人の漢詩作家

庭梅花發時。

ていはなはな 庭梅花をつくるの時

今朝玉池面、

こんちようきよくち 今朝玉池のほとり

氷解旭光移。

えおり 氷とけて旭日移りぬ

春江泛舟

屈曲湖中景、

くつぎまぐ 屈曲なる湖中の景

長堤籠淡煙。

たんえん 淡煙は長堤をおおいぬ

迢迢春風漲、

ちようちようふう 迢迢として春水みなぎり

撐出掉風漣。

さお 掉させば自づと風漣おこる

など、素直な幼兒の眼に映じた自然の景色を、平坦な表現で詠んでいるが、その着想はなかなか凡庸ではない。眼に映じたことをその情感を踏まえて直截的に詠じるといふ、これが杜甫のいう清新さであろうが、この作品には、この意味での新しさはないにしても、素描の裏に流れる自然主義的な感覚が、餘りにも清らかなのは驚かされるのである。

梅花薰風

繞舍玉梅發、

いゑ 舍を繞りて玉梅ひらき

紛紛簾外風。

ふんぷん 紛紛たりぬ簾外の風

起看花似雪、

た 起ちて看むれば雪のごとく

馥郁暗香通。

ふくいく 馥郁として暗香ながれぬ

落梅似雪

朝來捲簾坐、簾をまきて坐し

時見落梅飛、ときに落梅の飛ぶをみる

似雪春風裡、雪ににたり春風のうち

實慳香氣微、香氣のかすかなるを慳しむ

あたりを見ると、その手練は随分と老巧で、これが十歳を出たばかりのころの作品であるとは、頗る信じ難い。當時は今日と違つて、漢學とか漢詩などの、東洋的な文藝が盛んな時代であつたにしても、これ程の多作と工愁とをもつた幼少の作家は、そう多くあるものではない。この喚發な才華は幼年期の槐南にも比すべきものがあるう。ところが、この幼少な詩人を指導した田中牛門とはどれ程の詩的技術をもつていた人なのか審らかでないが、文字の添削の上から見ると、さして老練な作家でもなかつたものと思われる。

七言絶句は視覺型の作品が殆んどであつて、「望海」・「晚春旅中」・「麥秋」などがある。

梧桐葉落

亭亭疎影碧窓幽、亭亭たる疎影碧窓かすかに

雲散暮天輕雨收、雲散る暮天に輕雨おさまる

幾樹梧桐催搖落、幾樹の梧桐は搖落をもよおし

風飄焦葉報新秋、風にひるがえる焦葉は新秋を報ず

その用韻とか工愁の巧緻さという點から見ると、五言程には秀れてはいない。作者も五言の方は、ほぼ詩の格調を心得てはいたが、七言の方は、まだ理解が足らなかつたのであろうか。また、田中牛門の加筆にも随分と問題があ

る。ともかく、五言に比較して七言は数こそ多いが、佳作が少ないというのは、作者の詩學研究の過程を示すものとして、興味深いものがある。

しかし、この十歳前後の少年が實に情趣纏綿たる

曉 行

驛亭早發畫橋西、
驛亭あしたに發す畫橋の西
時見柳條落月低。
時にみる柳條の曉月
半角含紅纔辨色、
半角紅をふくみて色を辨するがごとく
前程處處曉烟迷。
前程處處に曉烟たなびく

秋 郊

靑女多情一片霞、
靑女多情一片の霞
晴を趁いて田家にいたらば
晴を趁いて田家にいたらば
稻花開盡膏腴地、
稻花は開きつくしぬ膏腴の地
陰處蟲聲秋意加。
陰處の蟲聲は秋意を加えぬ

あたり、着想といい、表現といい、餘韻といい、多情な才華を如何なく發揮している。これは上方の詩壇においても珍らしいことであつて、詩宗老儒の練達な技法には到底及びつかないにせよ、幼稚さがあるだけに、より清新さを感じしめるものがある。

このように、紫草は漢詩について、頗る多情な才能をもち、北野中學時代^⑤にもしばしば『六陵』に投稿したりしている^⑥。また、當時最も新しい技術の一つであつた寫眞に興味をいだいていたらしく、『六陵』一號に「寫眞術につい

て」の一文を草し、寫眞の實際的効用ともいうべきものを五項目掲げたりしている。こうした多情な詩人、それはむしろ文學青年ともいふべきかは、五高から京大に進學してからは、餘り詩作を試みなかつたようである。大學に進んで間もなく野戰に赴いたためもあつて、歿年まではこれといった作品を遺していない。わずかに『友蘭詩』十四集に近體の六首へ七言絶句四首・五言律詩一首・七言律詩一首が收められている程度である。この詩は『忠烈遺芳』に收録されており、石橋雲來が贊をして、

歲末三十而戰歿、誰得不痛惜、今錄遺詩數首、聊表弔意。

といつてゐる。まことに「性溫柔才敏穎、自幼多能多藝」なかれは、その詩情を十分に養うこともないまま、若くしてこの世を去つたのは、實に惜しむべきことといわなくてはならない。本稿の末尾に書かれた「亡兄の思い出」は、詩人の令弟芝川又四郎氏（前百又株式會社社長）の想い出である。^⑤

註① 昭和九年十月刊へ自家版へ芝川又右衛門發行

乾・坤の二卷に分けられていて、第一卷へ乾は32頁、第二卷へ坤は418頁からなつてゐる。200部の限定版である。

註② 五言絶句36首七言絶句126首が收められている。芝川

又右衛門の「備考」によれば、これらの作品は、高等小學校入學前のものであるという。

註③ 紫草の稿本『忠烈遺芳』へ一巻へでは、この詩の末二句は、

幾樹梧桐值搖落、

風飄扇影報新秋。

となつてゐる。これを『紫草遺稿』に收録する際に、

近代上方における二人の漢詩作家

註④ 稿本「忠烈遺芳」では、この詩の承句は

時見柳條殘月低
となり、結句は

前峯處處曉烟迷

となつてゐる。

このように稿本と印本との作品を互いに校勘してみると、印本に收める時に、僅か一・二字の補筆ではあるが、各所に雲來の加筆を認めることが出来るばかりか、印本の誤謬及至稿本にはなくて、印本に收められ

ている作品數首があることに氣付くのである。例えば、

一、印本 P. 10 の「逸題」二首八五言✓は、實は前詩の「新年」三首の中の二首であること。

二、P. 20 の「水邊欺冬」八五言✓と「初聞杜鵑」八五言✓は、稿本以外の作品であること。

三、P. 23 の「晚春躑躅」八七言✓は詩題は同じであるが、その内容は全く異り、

翠微烟樹暖芊芊、

尋入春山叫杜鵑。

啼鳥聲藏清境裡、

百花紅白競鮮妍。

となつてゐる。

四、P. 27 の「古松」二首八七言✓は稿本にない。

五、P. 29 の「遊博覽場」八七言✓は稿本にない。

六、P. 34 の「迷懷」の詩題は「述懷」の誤植である。

七、P. 36 の「追儻」八七言✓・「投毬」八七言✓・「競馬」八七言✓の三首は、稿本にはない。

八、印本八 P. 38 ✓は「新蟬」八七言✓で終つてゐるが、稿本には「古松」八七言律✓がある。實は P. 27 の「古松」二首を七言絶句二首として収めてゐるのは誤りで、聲律からいつても、當然、律詩の前四句八首聯・頷聯✓と後四句八首聯・尾聯✓

であること。

以上の語點などである。なお、稿本は雲來の圈點が施されておき、卷末に

是係紫草芝川又三郎氏所賦、戰歿後出于篋底、首首清麗可誦、然回憶當時情況則悽然不堪多讀也。

甲辰之冬日 雲來仙史閱并誌

と記されている。

註⑥

大阪府立尋常中學校大阪府立北野高等學校✓に入學したのは明治二十四年四月で、卒業したのは、明治二十九年三月八日第九回生✓である。

註⑦

明治二十六年三月十五日に、『大阪尋常中學校校友會報告書』の第一號が出た。これが雑誌『六陵』の濫觴である。明治二十九年一月に『報告書』第四號を経て、『六陵』第一號が創刊されたので、嚴格な意味いうと、明治二十九年一月からということになる。なお、昭和八年十一月一日に『六陵變遷史』が出されている。

註⑧

北野高校校史編纂委員會編『目で見える北野80年史』當時の『六陵』の文藝欄には、漢詩とか漢文の作品が多く、漢詩は一號に八篇、三號に三篇、四號に三篇、というような盛況であつて、作品の内容も仲々充實していた。安本健吉・廣田淡洲教諭をはじめ、片岡哲・山本全・松井翠溪・上野精一氏などの作品が收められている。就中、十五回生の上野精一氏八大阪朝日新聞

社主√には、

片帆幾點去來間、沙白松青鷗夢閑。
遙望水天髣髴處、清螺一髮紀州山。

(須磨浦展望—六號所収)

歸路迢迢心自清、垂楊暗處逐涼行。

銀河星蘸天如水、明月微風夜四更。

明月微風夜四更、橋頭客散覺涼生。

數聲玉笛不知處、隔水紅燈滅又明。

隔水紅燈滅又明、行行寬甸句難成。

箇中真趣誰能解、歸路迢迢心自清。

(訪友夜歸—所収)

曄曄紅墩岳色鮮、賜題聊又入新篇。

松梢栖鶴聲何妙、正是禁城欲曙天。

(宸題松上鶴—十五號)

があり、氏の若きころの多情な才華を窺うことも出来る。

註⑧

『友蘭詩』は石橋雲來が編集していた詩集で、その十四集には、當時九十二歳の小野湖山、舊龍野藩の儒家出身の股野藍田などの作品の首が収められている。

註⑨

芝川家と石橋雲來との關係は、文事的な面ばかりではなく、經濟的な面もあつて、雲來の息女は芝川邸に奉公に入つたりもしていた。なお、紫草は小學校入東區高等小學校第四分教場√時代には詩人磯野秋渚から習

近代上方における二人の漢詩作家

字を習っていた。△芝川又四郎談√

亡兄の思ひ出

芝川 又四郎

亡兄又三郎は、明治九年二月に大阪市東區伏見町四丁目三番地の本邸に生まれました。四歳の時、母は、なは難産で死亡しました。父は、はなの妹里くと再婚いたしました。里くは明治十六年二月に私を生まれました。従つて、兄は異母兄で私より七歳年長であります。兄は母を失いましたので、祖母が養育しました。幼少の頃は虚弱であつたそうで、祖母は用心深くなり、學齡に達しましても、學校での傳染病を恐れて、小學校へもやらず、家庭でそれぞれ専門の教師について謡曲・習字・漢文・漢詩を習い、高等小學校入學の頃には、達者になりましたので、東區道修町四丁目にありました市立東區高等小學校に入學しました。偶然ですが、英才教育を施されたと云ふ次第であります。高等小學校に入學しましてからは、漢詩を習ふことは止めて、英語を家庭教師に習いました。ここで其當時の學制を申上ますと、小學校は八年で、尋常科四年高等科四年で、高等科一年より英語あり、中學校は五年で、高等小學校四年卒業で入學し、入試はありません。中學校には第二外國語として獨乙語がありました。中學校の上に高等學校三年、大學は學部によりて三年又は四年であります。中學校卒業の學力は現在の大學教養課程一年終了と同程度の學力であります。中學校の學力の

低下したのは明治二十八年の入學生の時よりです。この時は高等小學校二年終了で中學校に入學することが出来たのです。中學校の學力は、二ヶ年低下したのです。舊制中學校は終戦までこの状態で續いたのであります。亡兄の時代の中學校は、國漢以外の教科書は原書で、中々程度が高いから、志願者全員入學出来ても、中途退學者は相當數ありました。當時の中學校長金子銓太郎氏は、一年志願兵出身の豫備の將校で、軍國主義の

人で、校友會雜誌には和歌俳句の投書は禁じ、漢詩のみ許しました。大阪府では中學校は一校でありましたが、先生では有名な漢詩人はありませんでした。國運隆盛の明治時代に生れ、明治時代に一命を終り、苦難の大正昭和の日本を知らぬことは却つて幸福な生涯であつたと思います。大學の同期の人で今尙健在の方もありますが、其方々を見るにつけても左の様に感ずる次第であります。

(昭和三十九年十二月)